茨木市中心市街地まちづくりシンポジウム

概要版

～次なる茨木へ。中心市街地と駅前のあり方～

開催報告

■次第

1．開会あいさつ

2．『次なる茨木・グランドデザイン（案）』の概要説明

3．【基調講演】

『持続可能なまちの姿を考える』

嘉名光市（大阪市立大学工学研究科都市系専攻教授）

4．【パネルディスカッション】

『茨木市の中心市街地と駅周辺のあり方について』

パネリスト：佐藤哲也（国土交通省　近畿地方整備局　建政部長）

忽那裕樹（株式会社 E-DESIGN　代表取締役）

木村正文（茨木商工会議所　専務理事）

福岡洋一（茨木市長）

コーディネーター：嘉名光市

5．質疑応答

6．閉会あいさつ

■参加者数：127 名

■1．開会あいさつ（福岡洋一茨木市長）

今の茨木市は更新の時期を迎えております。これからどのような価値観や哲学を持ってまちづくりをしていくのか岐路に立たされていると感じております。

中心市街地や駅前のあり方で言わせていただくと、モノ消費からコト消費へと価値観が変わってきていると言われています。モノ消費を前提に過ごされてきた方と、これからコト消費で生きていかれようとしている方とどう調和・調整していくかが課題であると思っております。

これからAIや自動運転の時代を迎えると言われております。その中で未来を見据えて中心市街地、あるいは駅前がどこまで将来の変化に耐え得るものになるのか。本日のシンポジウムがその一助になればと思っており、皆様にとりましても、これまで考えられてきたことがそれで良いのか、あるいは、これからどう考えていくのかについての学びになればと思っております。

■「次なる茨木・グランドデザイン（案）」概要説明（茨木市都市整備部）

「次なる茨木・グランドデザイン」は、本市の中心市街地において様々なプロジェクトを進めており、中心市街地の魅力あるまちづくりの推進にあたって、これらの事業を一体的・総合的にとらえて取り組んでいくための方向性やまちの将来像を示すものとして作成を進めています。

その内容は、行政が一方的に作成するものではなく、市民の皆様や、民間の方や大学など多様な主体が関わり、様々な活動や事業を展開していく中で、共有・発展しながらつくりあげていきたいと考えています。

このグランドデザインを共有し、多様な主体が関わり、活動する場や機会の創出を実現するためには、まちづくりに関心を持ち、自分事として活動する人を増やすとともに、担い手の発掘・育成につなげていくことが重要であると考えていますので、魅力と活力ある中心市街地のまちづくりの実現に向けご協力をお願いします。

次なる茨木へ。
茨木には、次がある。

■基調講演『持続可能なまちの姿を考える』（嘉名光市大阪市立大学大学院　教授）

1959 年の茨木市の最初のマスタープランでは田園都市計画や近隣住区論を中心に考え、地域コミュニティを作っていくと書かれており、JR茨木駅と阪急茨木市駅で駅前のまちづくりをしていこうと書かれています。特徴的なことは、オープンスペース計画として元茨木川緑地が計画の中心に据えられており、茨木市は昔から住みやすく暮らしやすいまちづくりを行っているまちだと思います。

『次なる茨木』我々がこれから考えなければならないまちづくりは、人口が減る時代です。前の時代と違う考え方をしないといけません。この中でも持続可能なまちの姿を思い描く必要があり、キーワードで考えると「拡大からたたむへ」「量から質へ」「つくるから、育てるへ」「バラバラから、編み物へ」となります。

人々の暮らしにどう向き合うかというと、これからのまちはどちらかというと総合化するまちづくりです。色んなものが混在しあうことで豊かな空間、豊かな暮らしを作れるのではないでしょうか。

人のための空間への転換ですが、人が減っていくときのまちづくりは良いことばかりではありません。スポンジ化といいますが、空き家や空き地等の使われない土地がまちに広がってくるのはやむを得ません。しかし、前向きに活用していく仕組みも出てきています。

今までは場所を作れば人は来てくれましたが、これからは人が減っていくため、もっと魅力的な場所にしないと人は来なくなります。皆さんが行きたいと思える場所をまちの中に作り、うまく活用することが重要ですが、主体が課題です。行政だけでなく住民や事業者、地域等が一緒になって地域を良くしていく活動を『エリアマネジメント』といいます。みんなを巻き込むためには、『シビックプライド』市民が都市に対して持つ愛着、自分達のまちは自分達のモノであるという郷土愛によって挑戦と共感を生むことが重要です。最近まちづくりの世界では、実現できるかわからないがやってみようという『Big Picture』と呼ばれる将来のありたい姿を共有し、ともに実現しようという試みが増えています。こういうものがこれからのまちづくりには必要です。放っておくと絶対にできませんが、みんなで協力すればできるかもしれない。もちろんすぐにはできないので、段階的にやっていく必要があります。

最後に、時代の都市空間への転換を目指して、これまでのまちづくりは、半世紀前のまちづくりがベースにあり、それをもとにまちを使ってきましたが、時間が経つにつれ老朽化が進んで来ていますし、駅前のあり方も変わって来ています。今また新しい形で時代に合わせ、古い再開発を変えていくということが各地で行われています。パリでは、モータリゼーションに対応するまちから、ヒューマニゼーションのまちに都市全体を変えようとしています。渋谷駅や枚方市駅前でも人中心のまちに変えようとしています。これからの都市が持つべき機能として重要なものはわくわく感や人と人が交流できる場所で、再開発ビル一番の目玉は市民広場です。我々が『次なる茨木』のことを考えて、目標年次を決めるが、そこで完成することはありません。また新しいテクノロジーが起きてきたら柔軟に対応できるエンジンみたいなものをまちの中に備えていく必要があります。アメリカでは、自動運転の世界になればどのように都市が変わるか将来像予測をしていますが、車線が減り、人中心の空間が増えています。都市空間自体、まちの姿も変わっていきます。今すぐではありませんが、20～30 年後にはリアルな世界になります。このようなことにもスムーズに対応できるよう未来図を考えておく必要があります。

■パネルディスカッション『茨木市の中心市街地と駅周辺のあり方について』

≪パネリスト≫

佐藤哲也（国土交通省近畿地方整備局　建政部長）

忽那裕樹（株式会社 E-DESIGN　代表取締役）

木村正文（茨木商工会議所　専務理事）

福岡洋一（茨木市長）

≪コーディネーター≫　嘉名光市

○木村：駅前ビルが建替え時期に来ており、どのように上手く建替えを進め、駅前のオープンスペースをどのように取るべきかお伺いしたいです。

○嘉名：都市計画には市街地再開発という手法があり、公共的な貢献をしてもらい、その代わりに税金を入れたり、サポートするという事業があります。高度利用によるにぎわいも含めた貢献や公共施設整備等の協力が必要ですが、駅前のあり方はこれまでと違ってきており、交通の為だけの駅前で良いのかなど、求める次の公共性とは何かを皆さんと議論していくことが重要です。駅を降りた時、これが茨木というまち、茨木市民が暮らしているまちというふうに見えるんだと思います。

○忽那：新しい公共性としてなんば駅前広場では、商店街や南海電鉄が一般社団法人を作り、自分達で広告料や利用料を徴収し、公共のお金を使わずに運営しようと計画しています。10 年前から協議等に商店街の方が自ら入って、取り組んできた成果を広場という形で共有していることがすごいと思います。

○市長：これからのまちづくりにおいて、ご紹介いただいた過程や手続きを踏まえてどうするのかが課題だと思います。箱物行政の失敗から学ぶ必要があり、持続性の観点や時代への変化に対応できる可変性などソフトから入り、まちづくりは人づくりで絶えずプレイヤーが生まれる仕組みを作っていかなければならないと思っています。箱から話を始めてはいけないと考えています。

○嘉名：100 年持つようなまちづくりをしないといけませんが、変化の早い現代において 100 年後を予測することは難しく、変化に対応できるまちづくりが必要であり、人づくりや作ったら終わりでなく、次々プレイヤーが現れてくる仕組みが必要で、それが新しい公共性なのかもしれません。

○忽那：茨木は色んな個性のある核があり、コンパクトに集中しながら関係を強化し、各エリアの個性が立つような取組が良いのではないでしょうか。一カ所に集めるような議論ではないと思います。

○嘉名：あらゆるものに 20 分でアクセスできるまちづくりを目指しているという中心市街地があることをお伝えしたかった。全国的に人が減ってまちが縮んでおりこれからどうするかという議論をしています。まちの担い手が減っていくことも確かで、まちの個性を磨き上げていくことは必要です。駅に近いとか地価が安いとか便利とかでは人はいなくなってしまいます。

○佐藤：多様な核ができた方が良いと思います。市民はJRと阪急駅周辺だけを頼りにしているのではなく、自分の生活圏がある。そのエリア内でまちづくりを自立的にしていけば良く、育った人が戻ってくるような環境整備が一番良いですね。生まれたところに誇りを持てるようなまちづくりを協力して進めれば良いと思います。

○嘉名：顔が見えるまちづくり。まちの形や姿というより住んでいる人のキャラクターでまちの形が決まることがとても重要です。歩いて暮らせるようなまち、非常に便利なまち、20MINUTESという言い方をするまち等そのようなまちに変えていこうとするとそれぞれがどうつながっていくか。駅前と中心部、元茨木川緑地と市民会館をどうつなげると良いかアイディアをいただきたい。

○忽那：茨木がどうなろうとしていくのか絵を出して議論し、使いこなせるというプロセスを踏まえて欲しい。

地面のレベルを歩いて楽しいという基準にして欲しいと思います。商店街を中心にした活性化のための駅前広場があって、市役所中心のところに市民活動を支えるような広場があって、管理・運営の権限を与えられた者が提携するようなことを行えば回遊性は自ずと向上するのではないでしょうか。

○佐藤：回遊性を考える時は、地域をまとめるまちづくり会社を含めて、地域のあらゆるものや、施設の声を聴いてまとめられるような仕組みがあるとネットワークができます。縦割りでなく横串でつなげることができる組織があると動きやすいのではないかと思います。

○木村：箱物の失敗例は、誰が運営していたか。使う方が担うという形で、皆さんでどのように運営していくか。JRと阪急が分断されているとの意見もあり、回遊性が無くなっています。歩く仕組みをまちづくり会社等が主体となって考えていけば皆さんの意見も取り入れていけると思います。

○市長：中心市街地の構造として、JRと阪急の間は歩く距離ではなく、市役所前の空間をつなぐ場にして、回遊性を生み出すという発想で取り組んでいます。一方で、市役所前にみんなの場所を作ると両駅前はどうするかという議論が出てきます。機能分担という意味でも考えなければならないと思っています。

○嘉名：駅前は重要な役割があり、多くの人が乗降する場所で、その人達がまちの中に出て来て、行ってみたいと思っていただければさらにまちなかの魅力は高まります。市役所周辺の魅力付けは大切で、その次に駅前をどうしていくか、どうつないでいくかが重要な議論になります。最後に、どんなBigPictureを考えれば良いかの視点など皆さんから一言ずつ頂けますか。

○佐藤：真似をしないまちづくり。集まった人達で議論して、ニーズを積み上げていくとまちが出来上がります。徹底的なワークショップができれば一番楽しい。茨木市の個性をどう活かすのかが重要です。

○忽那：BigPictureを描き、議論できるような場を作っていただきたい。それをやらないと次にいけません。ワークショップでは立場の交換が可能となり議論していくことができます。阪急とJRの間は、車を止め、十字の広場にすれば良いのではないかと思っていますが、それくらい次世代の話を検討して自分達でまちを変えていく。編み物をみんなで作っていければと思います。

○木村：若者も高齢者も共存できるようなまちが良いのではないかと思います。時代の変化に対応できる仕組みづくりが必要で、働く場を作る仕組みを中心市街地活性化基本計画の中で考えていきたい。

○市長：市民一人ひとりが自分にとって豊かな生活、幸せな暮らしとは何なのか。人生の最初から最後までを幸せに送っていただけるまちでありたい。自分事で考え、議論して積み上がってきたもので良いものになっていくと期待しています。皆さんと作っていくまちづくりですので、どうぞよろしくお願いします。

○嘉名：これからのまちづくりは、自分事としてアイディアを投げかけ、それに皆さんが答えや意見を出すというプロセスが重要です。意見がぶつかり合う中で一番良い答えが出てきます。そういうバイタリティーがあるまちはすごく魅力的で、活力あるまちづくりをプロセスとして楽しめることが重要です。

■質疑応答

○質問：まちづくりは人づくりから始まると思います。市長のこれからの抱負をお聞かせください。

○市長：茨木は大学等が多くあることが魅力であり、個性の一つです。背中を見せる大人がいないと学生も伸びていきません。背中を見せられる人間を作り、学生との関わりを増やすことが人づくりの一つの手段と感じています。

【問合せ先】
茨木市都市整備部市街地新生課　担当：三浦・下野
電話：072-620-1821　　FAX：072-620-1730